NiiGATA UNIVERSITY 文部科学省 地(知)の拠点

平成 30 年度新潟大学 COC＋社会人学び直し WG 高度実践看護師等育成事業

新潟地域看護研究会　NEWS LETTER

vol. 1 2018.8

第１回新潟地域看護研究会を開催しました

テーマ　保健師固有の支援技術を学ぼう！

平成 30 年 6 月 30 日（土）　場所：新潟大学医学部保健学科

社会人学び直し WG 「高度実践看護師等育成事業」では、社会人の学び直しの機会を提供し、新潟県における高度実践看護師等の地域包括ケアを担う保健医療人材の育成と定着化を図るとともに、雇用の創出や拡大を目的に、高度実践看護師等の啓発普及、人材育成プログラムの検討・開発等を行っています。

今回は、大学院での研究成果の還元と、高度な実践能力をもつ地域看護専門看護師（以下、地域看護 CNS）の活動の普及を目的として、第１回新潟地域看護研究会を開催しました。

Ⅰ　セミナー：実践と研究をつなぐ　13：00～14：00

「子どもの発達障害の特性を指摘された母親の子育てにおける体験－
発達障害の特性を指摘されてから専門機関の継続的な支援を受けるまで－」

話題提供者：新潟市保健所健康増進課　課長　伊藤由香

ファシリテーター：新潟大学大学院保健学研究科　教授　小林恵子

セミナーでは、日ごろの活動から、発達障害の特性を持つ子どもをもつ母親への支援のあり方に悩み、大学院に進学し研究に取り組んだ経過と研究成果について発表がありました。母親は、子どもの発達障害の特性を指摘された後に最も苦悩や孤独を体験し、母子のアタッチメント形成にも影響を与えていることが紹介されました。

参加者は、発表内容をもとに「健診場面で信頼関係を築き継続支援につなげるための技術」「アタッチメントを促進する支援技術」というテーマでグループワークを行い、日々の保健師活動について振り返り、子どもの発達障害を指摘された母親がそのような苦悩や孤独を抱えていることを保健師が理解し、全力で親子を支えていくことを伝えることの重要性を学びました。

日々の保健師活動で感じる疑問を研究的な視点でとらえ、理論として整理することによって保健師としての実践力の向上や活動の展開につながることを確認しました。

なお、伊藤さんの研究は今月発行の日本地域看護学会誌［21(2)，2018］に掲載されます。

○話題提供をして

看護研究という形で取り組むことにより対象や問題の現象をより深く理解できたことや日常の活動を研究的な視点で考える重要性についても参加者の皆さんと共有できたと思います。継続支援ができる保健師の強みを生かし、個から地域全体の支援へも発展させていければと感じました。

（伊藤由香）

Ⅱ　地域看護ＣＮＳからのコンサルテーションによる事例検討（新任者編）　14：30～16：30

「ALS の進行により身体状況が日々変わりゆくなかで、本人・家族が安心して療養生活を送るための支援について」

事例提供者：新潟市東区石山地域保健福祉センター　保健師　三木さくら
助言者：上越市健康づくり推進課　保健師　小林奈緒子　（地域看護 CNS）
　　新潟県総務管理部人事課　主任（保健師）　室岡真樹　（地域看護 CNS）
ファシリテーター：新潟大学大学院保健学研究科　教授　小林恵子

今回は、ALS の発症による病状の急激な進行に伴う生活機能の変化に、本人や家族が困惑し、関係機関もタイムリーな連携ができていない事例を素材に、地域看護 CNS のコンサルテーションを得ながら事例への支援について具体的な検討が進められました。

ALS 患者である A さん本人や家族のニーズを検討する中で、初期の支援では病気の進行を予測し、今後の身体状態や ADL の低下など起こり得る問題をアセスメントしながら、A さん自身が病気を受容していくプロセスに添った支援が必要であることを確認しました。また、A さんのニーズが表出されていない早期から、支援を開始することの重要性を確認しました。そのためには、「家族と自宅で暮らしていきたい」という現在の本人の希望を核に支援者同士が有機的につながる必要があること、保健師は本人・家族の思いを聴きニーズを明確化し、意識化していけるよう支援することや、支援者間でのニーズの共有を図ることの重要性を確認しました。

保健師は、難病の発症や診断といった、本人や家族にとっての人生のターニングポイントに関わることが多く、本人や家族が大きな危機を迎えたときにこそ、本人・家族の意思決定を支援していくことが求められます。丁寧な関わりによって本人や家族との信頼関係づくりにつながっている現状を生かしながら、支援チームでニーズを共有し、一貫した支援を行っていくことの重要性を確認しました。

○事例を提供して

事例を検討していただいたことで、保健師は本人の思いをじっくり聞ける存在であることに気付きました。所内でも検討を重ね、関係機関とも相談しながら、A さんにとってよりよい支援ができるよう努めていきたいです。

（三木さくら）

参加者・アンケート結果

1．参加者　セミナー：62 名、事例検討：30 名

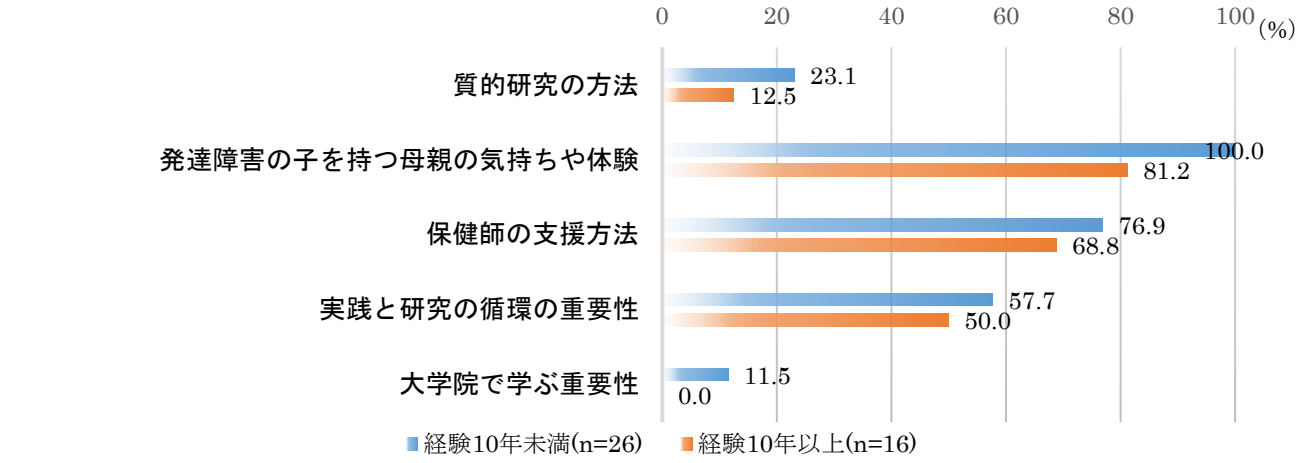
参加者の内訳

所　属	人数（名）	
	セミナー	事例検討
新潟県	4	4
新潟市	40	13
市町村（新潟市を除く）	7	4
学部学生	4	3
新潟大学教員	5	5
その他	2	1
計	62	30

平均就業年数（保健師）
セミナー：10.6 年
事例検討：　4.6 年

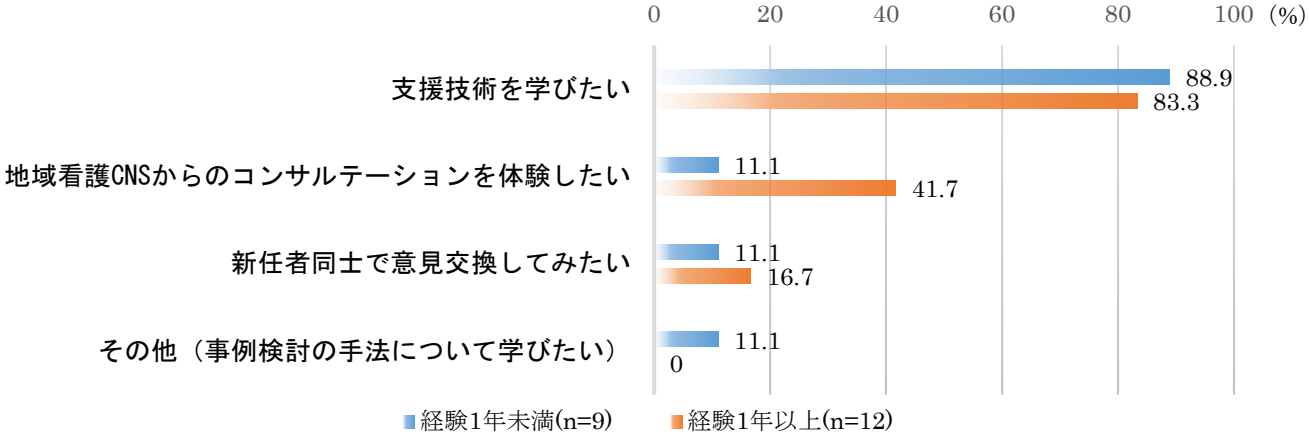
2．アンケート結果（保健師のみ・一部抜粋）

1）セミナーを通しての気づきや学び（複数回答）

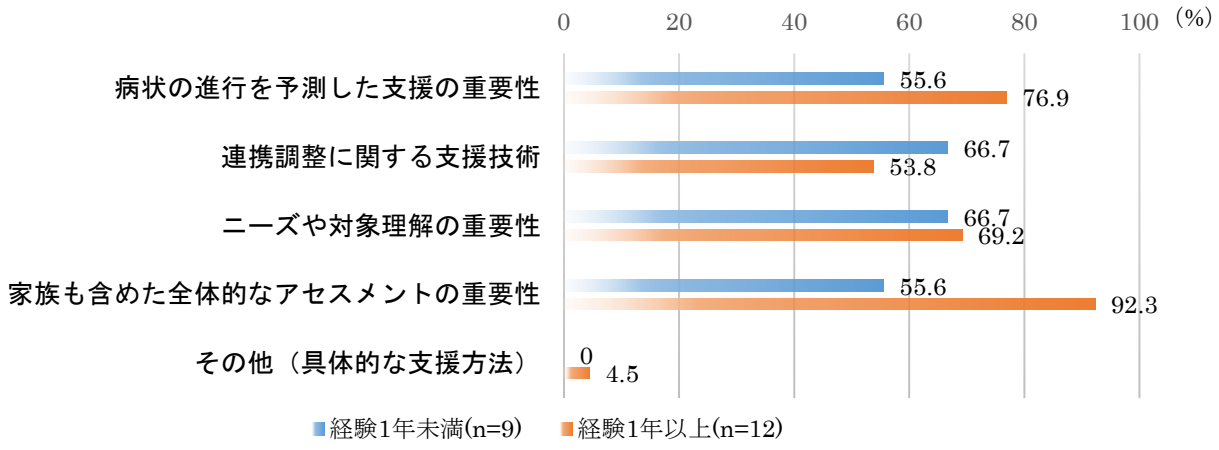


2）事例検討

①参加動機（複数回答）



②事例検討を通しての気づきや学び（複数回答）



３）新潟地域看護研究会にまた参加したいと思うか

「とても思う」52.4%、「思う」47.6%であった（n=42）。

全体をとおしての学び・感想（抜粋）

〇セミナー：実践と研究をつなぐ

・研究としてまとめを聞き、とても勉強になりました。

・グループワークが有意義でした。研究で振り返る大切さを改めて学びました。

・研究発表だけではなくグループワークがあることで、より深めることができて良かったです。

・学部生です。母親とその子のよりどころになるには、知識だけではなく人間性も重要なのだと気付きました。

〇事例検討

・職場でも事例検討会をお願いしたいと思いました。

・県保健師は直接的なサービスが減り、以前のような事例検討ができない現状です。これからもこのような研修会があれば、誘って参加したいと思います。

〇全体をとおして

・来年もぜひ参加したいです。

・大きな学びの機会になりました。ありがとうございました。

第１回新潟地域看護研究会を終えて

今回の事例検討では、ALS という進行性の事例をとおし、病期とその状態を予測し、展開していく重要性を考えることができました。疾患の特性の理解はもちろんですが、保健師として重要なのは支援する対象者や家族が今後どう生活したいのかを、まずはくみ取ることと考えます。疾患や障害を受容する過程には必ずといっていいほど葛藤が生じ、生活への意欲・希望は病期によって変わってくることもあります。その過程に寄り添い続けることで信頼関係も構築され、よりよい支援につながるのではないでしょうか。新任期のみなさんが、対象者へ“寄り添う”支援を積み重ね、成長していけることを期待したいです。

地域看護ＣＮＳ　室岡 真樹

本人と家族が疾患を受け止めていく過程における支援には、保健師が非常に重要な役割を担っていると考えます。今回の事例検討では“本人と家族に関わる支援者が同じ方向を見ていくこと”を意図して、保健師がどのように調整を図るかを参加者で話し合うことができたと思います。保健師は、長い時間軸の中で住民と関係者への支援を行います。一人の保健師が関わり続けることはできませんが、経過の中で変化していく対象者を理解し、先々に起こる課題を見据え、段階に合わせて関係者との調整を図っていくことは生活の支援者として関われる保健師だからこそ担える役割なのではないでしょうか。

保健師は地域において、複雑で解決困難な課題に出会うことが多く、知識とやる気だけでは立ち向かえないことも多くあります。そのような時に、事例検討はお互いが「どうして、なぜ」を出し合うことで、方向性の糸口を見いだせることもあります。全体を見渡すことが求められる保健師だからこそ、このような事例検討会がとても重要だと考えます。

地域看護ＣＮＳ　小林奈緒子

第１回新潟地域看護研究会に多くの皆様からご参加いただき、ありがとうございました。

セミナーでは、子どもの発達障害の特性を指摘され大きな苦悩や孤独を抱えた母親に対し、保健師は全力で親子を支えていくことを伝えることの重要性を学びました。また、事例検討では、難病の発症による病状の変化に本人や家族が困惑するなかで、病気を受容するプロセスに沿いながら本人・家族の意思決定を支援する重要性を学ぶことができました。いずれも人生の大きなターニングポイントに立った対象者に対し、保健師として目の前にいる対象者の揺れ動く思いにどのように支援していくのかという大きな課題と向き合う機会となりました。大変難しく、しかし重要な課題であるからこそ、エビデンスに基づく検討をしていく必要を感じました。

今回、貴重な研究成果から話題提供していただいた伊藤由香さんおよび、事例を素材として提供していただいた三木さくらさんに感謝と敬意を申し上げます。

私たちは、今後もこのような研究会をとおして、地域看護 CNS の活動や大学院での学び直しの機会を発信していくとともに、保健師の皆様に学び直しの機会を提供していきたいと考えています。

小林恵子・齋藤智子・成田太一・堀田かおり・八尾坂志保

次は、平成 30 年 9 月 1 日（土）と平成 31 年 2 月 2 日（土）にも新潟地域看護研究会の開催を計画しています。皆さん、是非ご参加ください。

主催：新潟大学大学院保健学研究科
（担当者　小林　齋藤　成田　堀田　八尾坂）
共催：新潟県　公益社団法人新潟県看護協会
全国保健師長会新潟県支部　新潟県職員保健師会
後援：新潟市　全国保健師長会新潟市支部

新潟地域看護研究会
〒951-8518　新潟市中央区旭町通 2-746
新潟大学大学院保健学研究科地域看護学
TEL: 025-227-0944（担当：成田）
Mail: chiiki@clg.niigata-u.ac.jp